

特選

随筆・評論

野村 宗一
山口 育子 選
山口 一

近い帰り道

大藪 町
外村 輝夫

結婚して四十八年。妻は若い頃から運動することが好きで、体力に自信をもっていた。お産以外で、入院経験がないのが自慢だった。その妻が三年前の春、夜中に腰の異常を訴え、激しい嘔吐に襲われた。夕食の食あたりを疑うが、同じ物を食べた私には症状がない。嘔吐はその夜限りだったが、それから一週間ほど腰痛がつづく。そのうち、歩けば右足の運びがもどかしく、強いしびれや痛みを感じる。数カ月後、二人で歩道を歩いていると、隣にいた妻が、突然何かにつまずいたように前のめりに倒れた。足があがっていかなかったらし

い。幸い大事には至らなかったものの、あごと両手、両膝を負傷した。もはや湿布薬の処置などでは、すまされない。それからというもの、整形外科医を訪ねること四カ所。痛みの度合いを医師に伝えることは難しい。ある病院の精密検査では、胸椎の一部の神経が冒され、手術しないと将来歩行困難を来すかもしれないという。医療に携わる人の一言が胸に突きささる。とはいえ、出来ることならメスは入れたくない。あまり先送りしてはだめだと言われていたのに、手術の是非を問いつつながら、もんもんとした日々がつづく。足の痛みが次第に強くなってきた。それから二年半がすぎた昨春秋、ようやく蒲生郡の病院で、手術を受けることに決めた。国道三〇七号線は彦根市内外町の八号線を起点に、大阪枚方の一号线に合流する。広い道幅に行き届いた舗装、少ない信号で、多くの交通量をもたらす。秋には、木々の紅葉に誘われるまま、湖東三山などを毎年のように

訪れていた。病院まで片道約一時間余り、同じ国道を走っているのに、観光と手術を控えた通院とでは周りの景色が、こんなにまで異なってみえるものかと、思い知らされた。様々なデータが揃った、三回目の診察日、妻と主治医から説明を聞く。微に入り細をうがっての説明のあと、看護師から入院の注意点が伝えられた。初めての病院であるが、患者の不安を和らげるような親切な対応に、ほっと胸をなで下ろす。病院側が、患者や家族に寄り添い、手をさしのべる行き届いた思いやりは、患者にとつてどれほど癒やされるかれない。十月十二日、手術室前。ストレッチャーに乗った妻が、私に向かって笑顔で手を振った。「それじゃあ、行ってきまーす」あまりにもあっけらかんとしているので、拍子抜けした。とは言うものの、病人にあまり深刻に捉えられないと、かえって気が気でないものだ。こちらの気持ちも楽になった。「終われば連絡しますから。ご主人様は、お部屋で、ごゆっくりお待ち下さい」本の同じ頁を、何となく読み返していると、「いま終わりましたよ。先生からお話がありますので手術室の前まで、おいでください」やっと終わったかと、時計を見れば一時間十分ほどが過ぎていた。手術室前で、主治医

が待たれていた。丁寧にお礼を述べると、その言葉をさえぎるように、

「ああどうも。無事終わりました。予測とは異なって、思わぬ髄液漏れが生じましてね」

髄液漏れ、と聞いて心が騒ぐ。

「処置をして、現在、落ち着いているようですので、心配には及ばないと考えています」

ほっと胸をなで下ろす。世間ではよく病院が取りざたされるが、大切なことは医師と患者に、信頼関係が成り立つことである。

集中治療室の妻は、麻酔から覚めず、私の呼びかけにも応じない。あとは看護師さんにお任せして、家路につくことにした。ひとりで走る帰り道は、遠く、長く感じた。

手術して三日目、岐阜と京都から娘や息子家族が見舞いに訪れた。妻は、術後とは思えない表情を見せた。妻にとつて何より心強いのは、一日も早い回復を願う、身近な家族の存在である。家族に辛いことが生じれば分かち合い、家庭は励まし合う場所となる。

妻と二人きりの生活も十数年。年齢を重ねるにつれて、言い争いもふえてきた。普段、互いに気づいているようで、気づいていないことも多い。妻の入院という事態の発生で不便を感じ、これまでとは異なる生活環境がしいられる。事前に炊飯器や洗濯機の使い方をメモ書きして、あちこちに貼り付けた。

しかし、なにかにつけて、自らが動かないと何も解決しない。妻が入院してからというもの、何か物足りない。今更ながら妻の存在感の大きさを、意識せざるを得なかった。

家事に費やす気持ちだが、日に日に薄れかけてきた半月後、ようやく妻が退院した。

三月初め、退院して三回目の診察日。

「順調みたいですね。体調をみながら少しずつ、運動や旅行など、されたら如何ですか」

X線写真を前に先生から、もう来院には及ばないと言われた、とのこと。妻が精一杯の笑顔で話す。国道三〇七号線は、冬の眠りから目を覚まそうとしていた。帰り道は近い。

(評)

若い頃から運動が好きで体力に自信を持っていた妻の入院。戸惑い不安を抱きながら過ごす作者の心の機微と日々が、妻の入院や手術の経緯とともに時系列を追いながら丁寧に描かれています。やがて妻は退院し、その後の通院も一区切りを終えます。作者はその日、病院からの帰り道を近いと感じ、その想いが冬の終わりの気配と重なる結びとなつて読者に深い余韻を残します。



私の将棋

本庄町

田口敏子

稲枝公民館で毎月一回ある荒神囲碁クラブの例会を、欠かさず楽しんでゐた夫が、何故か、晩年に私に教えてくれたのは、将棋だった。

子供の頃、挟み将棋はしたが、それさえすっかり忘れていたのに、夫は駒の並べ方から動かし方一つ一つを手にとって、実に根気よく教えてくれた。

「取った駒はじつと持っているだけではだめ使わなきゃー！」

「けちな根性を衝かれている様だね」と苦笑しながらも、次第に面白くなって、自分から将棋盤を持ち出し、手合いを催促する様になつて行つた。

たった八種類の駒が、竜になったり、馬になったり、矢面に立つ歩が、成り金に変わって攻め寄せて来たり、玉は守るのも、手に入るのも、中々一筋縄ではゆかない。

その頃、私はゲートボール同好会に入つて

いて、練習に余念が無く、夫は一人で家に居ることが多かった。平穩に日が過ぎて行くことに何の懸念も持たなかった。

八十歳で肺癌の手術をした夫の三年後の一日が、私と同じである筈の無いことに思ひすらなかったのは、何と云う不覚であつただろう。夫の老いは深まり、体力は、確実に弱つていたのである。

その後ついに入院した夫は、やがて緩和病棟に移された。付き纏う諸々の不安を、受け止めてあげられない力不足を恥じつゝ、私はやさしい看護婦さん達に助けられて只々終日付き添っているばかりだった。

そんなある日、にこやかに将棋盤を持って看護婦さんが入つて来られた。何かの折に、二人で楽しんでゐたことを洩らしていたのかも知れない。

久し振りに、病室で、談話室で、二人は駒を指して楽しんだ。時に研修医の先生を交じえることもあつた。

負けてもう一度と促す私に、「お前はひつこいでかなわん」と匙を投げられ、相手が病人であることに思い至ることもあつた。

あれから、早や十年近くが経つた。今、私は孫が買ってくれた「ニンテンドーのテーブルゲーム」で初級、中級、上級と将棋を楽しんでいる。勝つても、もう少し少

ない手数で、百二十手、いやいや百手までで勝ちたいとついつい欲が出て、徒に時間ばかりを食つてしまう。

少し自信が持てる程になり、対外試合に臨んでみるが、からきし駄目で、負けると悔しい。「お年はおいくつですか」等と聞かれると更に追い打ちがかかる。

将棋にもゲートボールに同じく、『直弼杯』があると知り、どんなものかと出向いたことがある。他で見知つた顔の誰彼や、友達同士、保護者同伴の小学生も多勢いて、中々の盛況だった。子供遣りしているとはいへ、小学生の中へ入るにはもらえなかつた。『直弼杯』は遊びでは無く歴とした試合なのである。

惨敗しての帰り、「よく出て来たねえ」と声をかけて来たオッサンがいて小突いてやつたら、「そんなつもりで言つたんじゃねえよ」と言うので、更にド突いたが、如何せん、素人万歳にもならず、尻切れとんぼのまゝ、駒への道を急いだ。

そんな或る日、新聞に、碁で殿堂入りが決まつた正岡子規の記事が目に入った。

「下手の碁の四隅かためる日永哉」
「矩夜は碁盤の足に白みけり」
碁だけで三十五、六句、詠っているのが決め手だと言う。

ついついのめり込んで徹夜をしまふ私

は共感してしまひ、もつと『子規』を知りたい思ひに絡れ、句集、その他の資料を図書館に電話で予約した。『ちばな号』巡回日まで、五日にも満たないというのに、どっさり持ち込まれた十冊の本には、碁に関するページに、青い付箋が挟まれていて、二十句ばかりを容易に見ることが出来た。

三十五年に満たない生涯に、死の十二時間前に自筆した『糸瓜の句』も含め、二万三千句を残した子規の、漱石、虚子、碧梧桐 等との厚い友情、何よりも前向きに、生を楽しんだ生き様に、深い感銘を受けた。

下手な将棋からも、さまざまな人との出合ひがあり、感動が生まれることを知った。

たまの連休、孫達が、わが家に泊りがけで来ると、将棋盤のお出ましになり、私はよく相手をする。

激しい『振り飛車』で攻めたる孫、一手を指すのに永い時間をかけ、慎重な上にも慎重に指す孫、イライラしながらアドバイスしたくて、うずうずしているが、自分からは一向に相手をしようとしなない孫。にぎやかに笑ひが飛び交うこのときが、私の至福の時である。

「やってるねえー」と腕組みしながら見ている亡夫の、うれしそうな笑顔が、そのあたりにちらつく。

(評) 夫からの手ほどきで将棋の面白さに魅了されてゆく作者。晩年における夫とのやり取りや、将棋によって自身の世界が広がっていくようすが生き生きとした文章で描かれていきます。将棋というものをとおして人々との出逢いや孫との愉しみを残してくれた亡き夫への作者の想いが、さわやかな読後感とともに心に響きま

特選

「干し柿」が運んで

くれたもの

犬上郡甲良町

上野初子

「おっ、粉が吹いてる。」

薄暗い物置小屋から不意に夫の声がする。それは紛れもなく喜びを伝える言葉だった。

ああ、やっと目標が達成できたか……。私も少しばかり安堵しながら、

「良かったな、大成功や。」

大胆にも実物を見ないで返事をしていった。今年二月のことである。

夫は、数年前に「干し柿」を作ること覚え、以来、秋が深まる頃になると屋敷畑の渋柿全を黙々と収穫するようになった。それが、今や我が家の年中行事となっている。そして、夫一人がそれらの皮を剥く。縁側に腰掛け背中を丸めて、ただただ夢中に皮を剥く。まるで子どもが楽しいゲームにのめり込んでいくかのように。

そんな姿を、私はいつも少し離れた所から見ている。剥いた柿を、板の間に何も敷かないで置いたりはいしなくとヒヤヒヤしながら。なぜなら、柿の渋が板に付着すると落とし辛くって、後の掃除が面倒だから。

そういう稚拙な思いから、ついつい小言を零したくなる私。でも些細なことで家の中の空気を気不味くしたくないし、所詮、夫の仕事を手伝いもしない怠け者の嫁だから、そこは辛抱するのが妥当だと割り切ることにしている。

だから、彼が一つ目の柿を剥き終わったことを確認すると、素早く新聞紙を敷きに行く。そうすることによって、なんとか危機をすり抜けるようにしてきたのだった。

ところで当の本人は、そんな私の警戒心など知る由もなく、全ての皮が剥けたならば、次の作業へとマイペースで進む。決まり文句のように、「吊す紐はないか。」「鉢はどこに

あるのか？」などと独り言のように畳みかけながら。

当然のことながら「アシスタント」の私は、先回りして必要であろう物を予め用意しておく。お互いができるだけイライラしないようにするため精一杯に智恵を働かせて。

そうして、私が差し出した紐と鉄を使って柿を小屋の軒下に吊す。その上高さまで揃えてズラリ並べた渋柿を、いかにも満足そうに眺める夫なのである。

しかしながら初めての年は、十日ぐらい過ぎた日の夕刻、パサパサというような何か嫌な心配がした。そんな非常時なのに運悪く夫は留守。なので不吉な予感を抱きながらも、私が恐る恐る小屋を覗いてみることにした。

すると軒下に吊してあった筈の柿が一つも見当たらない。まんまと鳥にやられたのであった。それも吊しておいた紐だけは残して。程よく熟してきたであろう柿の実だけをスツカリと持っていかれてしまったのである。

「しまった、やられた」と呆気にとられながらも、その一部始終を帰宅した夫に伝えた。やはり、「おまえが見張り番をしていなかったからや」と叱られる羽目にはなったが、生きるために食べ物を必死で探している賢い鳥に、鈍感な私が勝てるわけがない。それくらいのこと、夫にも理解できたようだ。

だから二年目、役に立たない嫁のことは当てることなく、今度は「鳥対策」に全力を注ぐ夫であった。鳥は羽根が何かに引掛かることを恐れる、ということを誰かに教えていただいたらしく、細くて丈夫な糸を、吊した柿の周囲に張り巡らした。

ランダムに張られているので鳥よりも私の方が引掛かりそうになったが、効果は靦面で、なんとか鳥の害は避けることができた。

ところが二週間ほど経つと、柿の表面に緑や黒の斑点が現れてきたのである。それは、どうやら黴のようだった。

風通しが良い所に吊しておくのになんでやろう、という疑問を持ちながらも為す術がなく、次の年もまた次の年も、「干し柿」の出来は同じであった。

そして昨年、柿を剥く夫の目が輝いていた。「吊す前に熱湯に漬けるといいんやって。」ボソツと呟きながら、鍋に湯を沸かすように、と私に指示をした。

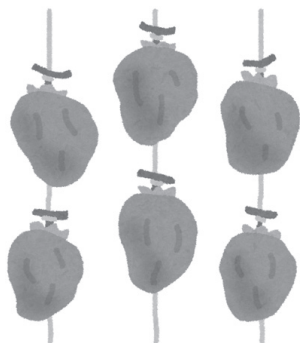
どうやら、熱湯に漬けると殺菌されるので、黴の増殖が防げる、ということらしい。どれだけ効果があるかも分からないが、兎に角やってみよう、というのが夫の意思であった。そこで一つひとつ丁寧に湯に浸し、やはり毎年のように小屋の軒下に吊した。その作業を特別な思いを込めて見守っていた私。

やがて二週間が過ぎた。あの黴は生えていない。そして一か月が経つ頃、柿は程よく乾いていたのだった。それで夫は、段ボール箱にドッサリと藁を入れ、その中に「干し柿」を大事に委ねた。

長くて寒い冬の間、藁はしっかりと「干し柿」達を守ってくれていたのだろう。柿の中からにじみ溢れた白い粉は、愚鈍な老夫婦に、細やかな幸せを運んでくれたのであった。

(評) 数年前に干し柿作りを始めた夫。

そのマイペースなやり方ゆえに否応なく下仕事や補佐を強いられる作者のようすが、その心情とともにテンポよく軽妙に描かれています。ふたりで試行錯誤を重ね、やがて干し柿は完成します。読者にほのぼのとした共感と、柔らかな読後感を抱かせる佳品です。



残したい言葉

芹橋一丁目

楠 亀 美恵子

身近な人の突然の訃報や、先日、元ヤクルト野村監督の奥さん（野村沙知代さん）が心不全で突然の訃報会見を聴いていると、昨年歌舞伎俳優市川海老蔵の会見を思い出す。

「昨夜妻の麻央が旅立ちました。不思議なことですが、声をかけると聴こえたのか最後に、『愛している』と言ってくれました」と涙を流していた時の映像が蘇ってくる。短い人生だったが、最期まで笑顔を忘れず、一日でも長く生きていたい心で頑張った麻央さんの最期の言葉であった。

人間は意識が無くなった時でも、耳は聴こえていると、主人の危篤の時に言われた医師の言葉が蘇ってくる。

平成二十一年十二月二十二日正午、主人は交通事故で救急搬送されICUに眠っていた。既に意識はなかった。その時医師は、「脳幹出血していて手術は無理です」と言う。一度家に帰ってきたが、直ぐ病院から連

絡が入り、容態の急変を告げられた。医師は、「延命治療はどうしますか。耳は聴こえていまずので、声をかけてあげてください」直ぐに答えを出さなければならぬ。あまりにも突然のことで頭の中は混乱してしま

い、「まだ死んじゃ駄目。私を置いて逝かないで」と泣き叫んだ。

すると、血圧や脈拍も上がる。口は少し開いている。必死で目を開けようとするかのように見えたが、何かを話したいようだが言葉にはならない。すがりつく私の方を見つめたまま息を引き取ってしまった。

「意識がなくても聴こえていますから」と医師の言った言葉通り、脈拍や血圧の変化に表れていた。

夫は何を言いたかったのだろうか。主人の元気な時の口癖は、

「わしは、お前の最期は必ず看取ってやる。九十歳でも、百歳でも生きて守るから心配しなくていい」

その言葉を信じて疑うことなく生きてきた。平凡な日々を積み重ね、家族揃っての新年を迎えるはずだった。

私がK大学病院に入院中、既に骨髄炎になって、薬の副作用で、音も右膝関節も失くしてしまっていた時に襲いかかった「DIC」

感染症。病院からの危篤の知らせに、飛び乗った電車の中で夫は、

「白い布に包まれたお前の骨を抱えて帰る姿が、目の前に何度も浮かんだ。電車の中で足の震えが止まらず、車中の二時間がとても長い程長く感じた」とも。

私は、死を目前に、意識が朦朧としていく時、父と母の顔が浮かんだ。

「まだ、迎えに来ないで、まだまだ死にたく無い。助けてください」と祈り続けていた。

主人の顔を見た時は、何故か気持ちが落ち着き、安堵を感じたのが、かすかな記憶に残っている。十二年の闘病中、何度も死の淵を彷徨って、苦しい辛い思いをして闘ってきた。今ある命が不思議なくらいだ。

主人との思い出が次々と、走馬灯のように蘇ってくるようだった。

「お前をいつまでも見守ってやるよ」

フツと我にかえると、娘が立っていた。目が潤んでいたからだろうか、

「何考えていたの」

「昨年の麻央さんの最期の言葉やら、お父さんは最期何を言おうとしたんやろう…。」

すると娘から思いがけない言葉が返ってきた。

「お母さんは、耳が聴こえないから、お父さんが最期に何か言ったとしても、聴こえなかったのでは。もし、お母さんが同じ状態になっても、私らの呼びかけも聴こえんのやな」と言うのだ。

あまりにも突然で予期せぬ言葉に、ショックと事実に戻す言葉もなかった。

昨年七月五日私の誕生日に、孫娘二人共七月六日と八月七日と近いので、毎年三人合同の誕生会をしている。ふと、その日に上の子が何を思ったのか、

「お婆ちゃん、これからもズ〜と一緒
に誕生会していきたいね」と
言ってくれたのだった。

何気なく言った言葉だろうが、私の心には格別の深い意味を感じ嬉しかった気持ちが残っている。主人他界後、娘や孫娘二人に励まされ、勇気を貰って生かされている。ふと、娘の言葉も重なり、以前書いた「遺言書」を思いだした。

「もう一通書いて置こう」と思い立つ。
呼びかけが聴こえない私の残したい言葉を、

「幸せな人生だったよ、ありがとう」と。
「この書を開くのはまだまだ先にしてよ」と、
主人の遺影に向かって目配せをする。

(評) 人は亡くなる間際、意識はなくなるとも耳は聴こえている、という説を軸に書かれた作品。丁寧な文章で綴られた、夫が交通事故で亡くなる場面が印象に残ります。人生最後の言葉という重い主題に挑んだ作品ですが、家族とのやり取りを描いた最後の部分、作者の明るい今後を感じさせ、大切な家族に残したいという一行の手紙とともに、読者の深い共感を得る結びとなっています。

入選

渡邊楠亭の生き方

平田町

愛藤 眞佐雄

泰不驕 (泰にして驕らず)

心境泰然知足閑 自無災害到為患

満堂餘樂長春色 萬福花開積善山

この漢詩は、江戸時代後期の儒学者で「農耕詩人」とも称される渡邊楠亭の作である。

心境が泰然として満足を知らず、自ら災害を患うに到ることは無い。すべての家の人々が楽しく春を感じることで、幸福の花は善行を積んだ山に咲き香るだろうと詠う。

四年前に私は、渡邊家で楠亭自筆のこの詩の扁額を拝見した。筆で力強く書かれた「泰不驕」の文字が、今も脳裏に焼き付いている。渡邊楠亭の名は、広く知られてはいない。それでも、私には心惹かれるものがあった。退職後の私に、「どのように生きることが幸せなのか」を示唆してくれるからである。

滋賀県教育会編『近江の先覚』では、楠亭を「湖東の聖人」と題し、次のように記す。

渡邊楠亭は、坂田郡米原町筑摩の人である。渡邊又次の長男で一八〇〇(寛政一二)年に生まれる。通称を司馬次郎といい、代々農業のかたわら酒を売って生活をした。

幼小より学問を好み、同村の竹中言語や近江町高溝の来照寺住職・惠念から素読を学び、その後は独学自修すること十数年、昼は農作業の間も惜しんで書物を離さず、夜は寒灯の下で読書にふけり、ついに朱子学の奥義をきわめるまでに至った。

楠亭は後に家産を弟に譲り、専ら門人を教えた。楠亭の名声は広く伝わり、学びに来る者は地元農家や寺院の子弟及び彦根藩士など数百人にもなった。

常に渡辺崋山や梁川星巖等の名士とも交わり、その往復文書が遺っている。

一八五二(嘉永五)年、領内を巡視した藩主の井伊直弼は、楠亭の徳行を賞し金子

若干を贈った。

一八五四（安政元）年、五十四歳で没す。

一九七四（昭和四十九）年、田中弥一郎氏は入江小学校に赴任した際、校長室で楠亭の肖像画に出会う。氏は先の資料等を読んで、楠亭の生き方に感動する。さらに、楠亭の生

家を訪ね、『楠亭詩鈔』を発見する。氏は文筆家であり、漢文にも通じていた。多忙な仕事を兼ね、五年の歳月をかけて『楠亭詩集とその背景』と題した本を自費出版した。

私はその本のことを知り、五年前に田中家を訪ねた。氏は、すでに亡くなられていた。遺された本を借り、退職して半年後にその復刻版を出版し、関係機関に配布した。

その本に載る五十三編の漢詩から、楠亭の考えや生き方をより深く知ることができる。例えば、「春草」「賞梅」「大洞春景」と題した詩で、楠亭は季節の変化や自然の美しさを味わうことの素晴らしさを詠っている。

次の「録秋」の詩では、秋風が辺り一面に吹き、山に霜が飛び始めると稲の取り入れて活気を帯びてくる様子を詠う。忙しい農事に勤しむ楠亭の姿が見えてくる。

西風十里稻梁肥 昨夜山中霜始飛
正是家々農事鬧 戴星争出戴星帰

こんな話も伝わる。ある日、遠来の客が楠亭を訪ねて来たが不在であった。夕刻まで外

で待つと、一人の農夫に出会う。走り寄って

楠亭のことを尋ねると、その農夫こそ楠亭であった。客は意外なことに驚嘆したという。また、夏のある日、儒学の道とともに志す野村東臯が楠亭を尋ねて来ている。

夏日野村君来遊喜賦
道學先生同窓翁 一窓相對座清風
大湖涼味君兼知 奥在怡々快々中

窓辺に向かいあつて座ると、湖面から爽やかな風が吹き寄せる。心地よい涼しさを味わい、部屋の中は快い喜びに包まれたと詠う。この時、東臯は楠亭に藩儒への誘いに来たようだが、楠亭はそれを断つたといわれる。

一方、世間では尊皇攘夷論が飛び交い、飢饉を発端に打ち壊しが起こる。内外とも不穏な情勢のなか、幕府の厳しい改革を中国の故事に例えて暗に批判する「商鞅」の詩もある。楠亭と親交のあつた彦根の藩儒・中川祿郎は、「楠亭記」に楠亭を次のように評す。

「楠亭は、中国の蘇軾にも匹敵する詩人であり学者である。高い理想にむかって自分を高めることを生きがいとし、名を上げようとせず、自分にふさわしい生き方をしている」

また、浅井町の高畑出身で漢詩人として有名な小野湖山は、次のように哀悼の意を表す。

「遠近慕高義 会葬幾千 往時藤樹氏
今日楠亭子 偉哉湖東西 賢哲後先起」

遠近より高い徳を慕い、会葬に幾千の人が集

った。かつて中江藤樹、今は楠亭と湖の西と東に賢人と哲人が後先に現れたと称える。

学究と農事とを両立し、学んだ知を詩作や教授に生かした楠亭。その底流には、「泰不驕」の信条があつたのであろう。「名を成さずとも日々善行を積んでいくことで幸せの花が咲く」と、楠亭は私に語りかけてくれる。

（評）米原市に生まれ農耕詩人と称された渡邊楠亭の生涯とその作品が丁寧に記されています。長年に亘る研究内容にとどまらず、先人の残した本を自ら復刻出版をした経緯など、評論にありがちな史実のみの羅列ではなく、作者の熱意や想い、楠亭の詩から得られる普遍的なメッセージを取り入れることよって、作品がより深く読み応えのあるものになっています。



電話が届けた風

日夏町
田中恵子

私には三人の子どもと四人の孫がいる。それぞれの成長過程で、朝日のようにまぶしく見えた瞬間がいくつもあつたはずなのだが、ほとんど忘れてしまっている。

一番下の孫は男の子。今、小学一年生である。この子だけでもその一瞬を忘れないように書き留めておこう。一、二年先に「このクソババア」と言うかも知れない。その時に、「まあ、そんな言葉を使うようになったんか」と走り寄って抱きしめたい。そう思えるだけの充分なものを、今、もらっている。

この子は乳児性湿疹が酷かった。顔は出来物で埋まった。背中も腹も手も足も湿疹が出来ては消え、また出てきてさらさらしていた。五番目か六番目に駆け込んだ皮フ科の医者が一目見て怒った。

「こんなに酷くなるまで何していたんや。皮膚呼吸が出来にくくなっているやないか」

母である私の娘は泣いてしまった。泣いたけれど、その医者は、娘が一年間の育休を終

える前に、子どもらしいはちきれそうな皮膚に戻してくれた。

三歳の時だったと思う。ゆるキャラ祭りに連れて行った。彦根市では毎年秋に全国から二百近いゆるキャラが集まってくる。城を中心に大通りや広場のあちこちにゆるキャラが出現し、あふれ返る観光客を楽しませてくれる。

タコのゆるキャラを見つけた。十人近い子どもや大人達が取り囲んでいる。握手を求めてくる人を握り返しながら、順番にカメラに収まりポーズを取っている。後ろからも横からも突き返されていて、タコは大忙しだ。

「タコさんと握手しに行こう」

「僕は行かへん」

踏んばって動かない。

「みんな行つてるで、お姉ちゃん、呼んでる」
タコと握手した小学一年の姉が手を振っている。

「タコさんはシミを吐くんや。急にブーと吹きつけるんや、僕はカラスさんみたいにまっ黒になつてしまふ」

ハッとして手を離れた。いつの間にかこんなことを知ったのだろう。私はタコのシミからこの子を守ってやらねばならない。

「本当や、逃げよう」

タコを求めて押し寄せてくる人波と対抗し

た。着物姿の女の子のゆるキャラが見えた。二人で手を取り合つて、そちらへ突進した。

今年二月三日、多賀大社の節分祭に娘や孫達と出掛けた。

「鬼が出てくるで、どうする。行くの止めようか」

「平気、僕、一年生や、今度は二年生やで」

去年のこの時期、保育園で鬼が出てきた時、大泣きしたと聞いていた。今でも叱る時、「鬼に来てもらおうか」の一言で表情が変わることがあるのだ。

午後二時、能舞台で三匹の鬼が舞い始めた。その後、鬼達は左右に別かれ、両側に張り出された仮ごしらえの長い廊下に進みだす。時折、突然に唸り声を上げ、手や足を上から突き出し、見物客に襲いかかってくる。

私と孫は豆を取ろうと最前列にいた。鬼の手が伸びた。鬼の顔が迫る。二人で小さくなった。孫は背中を丸めながらも首をねじり、ちらつと斜めに鬼を見ようとす。目を閉じる。開けてまたちらつと鬼を見る。

年男、年女がぞくぞくと現われる。鬼は豆の集中攻撃を浴びて、よろけながら退散した。「鬼、恐かったなあ」

孫は黙っている。少しして彼は私を見て、しっかりした声で話し出した。

「ちょっとだけやけど、鬼の顔の後ろに別の顔があつたのが見えたんや」

腕を組んで思案顔だ。こんな経験を重ねて子どもは大きくなつていくのだろう。

その時、思い出した。去年の真夏のことだ。娘の所に電話をすると、この孫が出た。

「毎日暑いねえ、元気にしていますか」

「僕はとても元気やで、バーバは暑いのか」

「暑くて、ちょっと弱っています」

「待っていてな」

その後、何の音もしない。トイレに走つたのだろうか。トイレの回数が多い子だ。

「バーバ、どうや、涼しくなつたやろう」

「えっ、ちつとも涼しくならへんで」

「おかしいなあ、もう一回やってみよう」

また何も聞こえなくなった。

「どうや、今度は。涼しくなつたか、二倍の力を出してみたで。団扇の風、行かんか」

電話の先に、団扇を手にした孫がいる。

「ああ、やつと涼しくなつた、今、届いた」

「もっとあおいであげる」

団扇の風は柔かい。孫の心も柔かい。

今年の夏は、暑いと訴えてみても、電話の風は、もう届かないような気がする。

(評)

末孫の愛らしい姿を文章にして残しておきたいという作者の想いに満ちた作品です。一、二年先には悪態をつかれるかもしれない、としながらも、それをも成長の過程と嬉しく思うだろうと記す作者の愛情に読者は共感を抱くでしょう。題名にもなっている団扇のエピソードが心地よい余韻を残します。

入選

大きい波に

西今町

松本 トシ子

近畿直撃の予報の台風が少し南よりのコースを取り当地は被害なく過ぎた。

いつもの様に、パソコンでイラストを描いている息子が「びわ湖を見に行きたい」と言う。「台風が過ぎたとは言え、影響で何が起るか分からない、危ないので明日にしたら」と、諭すように言ったが「僕はその台風の後湖を見たいのや」と譲らない。普段はあまり無理を言う子では無いので余程の事である。午後一時を過ぎたばかり、時間はたっぷ

りである。行く以外にない。

息子は、今十八歳。四歳の時、進行性筋ジストロフィー症と診断され、中学二年の時から酸素と呼吸器、痰の吸引、在宅医療・介護と車椅子の生活である。

養護学校へ高等部から入学し、そこで見付けた自分に出来る唯一の楽しみはパソコンでイラストを描いている。その参考にしようとするのびわ湖の様子を知りたいのである。

目の前のパソコンを終了し片付け、上着をはおらせベッドから電動車椅子へ移動、呼吸器、痰の吸引機のほか、こまごまとした忘れ物がないかをチェックし、全てをワゴン車へ乗せる。この用意に一時余り掛かる。

私たちは、休日ともより学校の行き帰りさえ通学路を変えて「探検！」と言つてはドライブをする。

湖の波と風を真近かに感じられる所へ行くのに、迷いはなく暗黙の内に決まる。私は、その場所へ車を走らせた。

台風の余波で湖の波は高く、水も濁っていたが空は青く対岸まで見渡せた。車の窓を少し開ける。やはり風は強くすぐに窓を閉める。砂浜は、かなり水を含んだ色をしている。

陸からの水路が砂浜に伸びて砂の色が濃く帯状に途中から二本の支流になっているのが見える。

おじさん（男の人）が一人砂浜を歩いて来る。おじさんは、水路に気が付くだろうか、私たちは、路上の高い位置の車から見ているので砂浜がよく見える。危険だよ気付いてと口に出さなかったが全く同じ事を心配している。おじさんはどんだん近づいて来る。

私たちは砂浜を歩いて来るおじさんを見ている。同じ光景を同じ目線で見てもそれぞれの立場と経験により、物の見方や考え方で違う思いをする事が多い。

ところが今「あっ」と思った瞬間おじさんの片足が大腿部まで砂に埋もれた。あまりにも突飛な事を考えていた私たちに同じタイミングで起きた出来事に、思わず声を上げて笑ってしまった。決しておじさんを笑ったのは無い、同じことを考えていた自分たちへの苦笑いだったが、笑い声がおじさんに聞こえたらしく、ちらっと車の方を見られたような悪かったなと思っただが仕方がない。

息子の痰の吸引も忘れ車を飛び降りた私はおじさんを助けに行くつもりだった。正に走り出そうとおじさんを見ると、おじさんは自力で足を抜き何事も無かったかの様に歩いて行くのが見えた。

一部始終を見ていた息子は、おじさんの無事な様子に安堵と安心の目で、車に戻った私と微笑み合った。

その後、暮ゆく初秋の空や湖の移り変わりを心行くまで眺めていた。こうした二十四時間の介護生活の私に一人きりの時間は無い、それを不服とも思わない。

その私にママ友から「自分の時間が無いので子どもの事も放つたらかしで…」とよく聞くが。それを聞いて不思議に思い「じゃあ何しているの」と聞き返す「内職や外へ仕事に行っている」との返事である。外へ仕事に行っていると言ってもパートタイムで働く場合が多い。パートタイマーなら家事をきちんと出来て、子どもが学校から帰る時間には家に居るこれも立派な母親の仕事である。この様な仕事のやりかたを選べば良い。これと言えば非難を受けるかもしれないが、ご主人がいて仕事を持たれている家庭では、ご主人の賃金で生活は成り立つはずだ。家事と子どもを放っておいて仕事大事と言うのは、お金儲け以外にない。お金儲けより今は、今でしか出来ない子育てを大切にすべきだと思う。ママ友から「自分の時間が無い」と嘆きを聞く度に「どうして作らないのか、作ろうとしないのか」と思う。私は、息子や家族との共有の時間がある。その時間は一人の時より更に有意義で楽しいときであり、大切にしたい。

（評）養護学校の高等部に通う息子さんと作者家族の懸命かつ前向きな日々が、淀みない静謐な筆致で綴られています。コンピュータを使ってイラストを描くことが趣味の息子さんの願いで台風の影響の残るびわ湖まで波を見に行くふたり。浜辺を歩くひとりの男性をめぐる少しユーモラスなエピソードが一葉のモノクロ写真のような余韻をもたらすとともに、結びで語られる作者のメッセージが心に残る佳品です。



佳作

父の煙筒

大藪町

脇坂修身

佳作

日傭

甘呂町

小野和子

佳作

正月の独楽遊び

正法寺町

高井豊

佳作

笑顔と、

プラス思考が一番

米原市

竹林愛湖

《総評》

今年も十九編の力作が寄せられました。

題名や書き出しに工夫を凝らして一気に読者を惹きこむ作品や、考え抜かれた結びの1節が深い余韻と感銘を残す作品など、読者の存在を想定して書かれた作品が多く見られ、あらためて彦根市民文芸のレベルの高さを感じました。どの作品にも作者の強いメッセージや大切な想いが込められており、今回の選考もたいへん難しいものとなりました。

限られた紙枚で作品をまとめるためには、内容が一日の出来事であれ数年間の思い出であれ、作品に取り込むエピソードを選別する必要があります。随筆は小説と違い実際の出來事や作者の想いを書くものですが、あれもこれもと詰め込むのではなく、その作品に必要な情報を削ぎおとすことで、作品の軸が安定し、作者がもっとも伝えたい想いやメッセージがより鮮明に伝わります。

今回の合同審査会では、そうしたエピソードの絞り込みに加えて、書きあげた作品をさらに何度も読み返して手直しを重ねる「推敲」の大切さも議論にありました。

山口一

